

2021.3
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 富薬

3号

第43巻
No.380



アーモンド *Prunus amygdalus* Batsch.var.amara Focke (バラ科 *Rosaceae*)

生薬

ハタンキョウ（巴旦杏） 秋、果実が成熟すると果肉が乾燥し裂けて核が離れる。核を割って仁を取り出し陽乾する。

成分

amygdalin、emulsin、脂肪油、タンパク質など。

効能

苦い味がするものを苦扁桃といい、水蒸気蒸留して得られた苦扁桃水を鎮咳薬として用いる。甘扁桃は滋養に食用とする。脂肪油はオイルマッサージに外用し、緩下薬としても内服する。



生薬 ハタンキョウ（巴旦杏）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



暖地と乾燥を好む、高さ4-8mの落葉小高木で、葉はモモ (*Prunus persica*) に似て長さ7-10cmの広披針形で先端は長く尖り、縁には細かい鋸歯、1-2cmの葉柄があります。花もモモに似て淡桃色から白色で径3-4cmと大きく、3-4月頃、新葉が展開する前に咲き、園芸的価値も高く評価されています。成熟した果実はモモの果実より扁平な形をしているため、別名の「扁桃」の名が付きました。

トルキスタンやアルメニア、パミール地方などが原産地と考えられていますがはっきりとは分かりません。栽培は西に広がり、『旧約聖書』の「創世記」にイスラエルの祖ヤコブは「ポプラ (*Populus* ssp.) とアーモンド、スズカケノキ (*Platanus orientalis*) の生の枝を取り、皮を剥いでそれに白い筋をつくり、枝の白い所を表し、皮を剥いだ枝を、群れが来て水を飲む鉢、すなわち水ぶねの中に、群れに向かわせて置いた」とあることからBC1700年頃にはかなり栽培されていたと考えられています。

紀元前に小アジアからギリシア、ローマの地中海沿岸に栽培が広がったことは容易に想像され、ギリシア神話に登場し、ディオスコリデス (40-90) の『薬物誌』にはギリシア語「amugdalē」(美しい木) の名で「苦いアーモンドの木の根は、つぶして煮てから用いると、顔の日焼けのシミを取り去るが、アーモンドの実そのものをパップ剤として貼っても同じ薬効がある。あてがっておくと月経血を排出させ、酔およびバラ油に混ぜて額やこめかみに貼り付けると、頭痛に効く。ブドウ酒といっしょに用いれば、夜間に激しく痛む膿疱によく、ハチミツとともに用いれば、膿腫、ヘルペス、イヌの咬み傷にも効く。食べれば鎮痛作用があり、便通を促し、催眠効果をもたらし、尿を利す。また、ミョウバンとともに服用すれば、吐血にもよい。水で服用するか、テレピン木の樹脂(松脂)とともに舐剤として服用すれば、腎臓病や肺の炎症に効く。レーズン酒とともに服用すれば、排尿困難や結石に苦しむ者によい。牛乳およびハチミツと混ぜて舐剤として服用すれば、肝臓病、咳、鼓腸にもよい。酒を飲む前に、これを5つないし7つ食べておけば酩酊しないですむ。適当なものに混ぜて食べさせると、キツネが死ぬ。この木の樹脂は収斂をおこさせ、身体を暖める作用をもっており、服用すれば吐血の治療によく、酔とともに塗れば、膿瘍をきれいに治す。薄めたブドウ酒で服用すれば慢性の咳に効き、レーズン酒で飲めば結石に苦しむ者によい。食用になる甘い実の薬効は苦いアーモンドよりずっと劣るが、減弱させる作用や利尿作用がある。新鮮なアーモンドをその皮ごと食べれば、胃液をちょうどよい濃度にする」とあり、多様な薬効をもつ苦いアーモンド (amara苦い) と主に食用の甘いアーモンド (dulcis甘い) があることが記されています。東洋医学で使う甘杏仁 (*Prunus armeniaca*) と苦杏仁との関係と類似しています。

『本朝食鑑』(1692)の「桃」の項に「近代蛮種に阿米弁桃と云う者あり。樹高からず、葉狭小、花細かに淡紅、枝に粘って繁重して窠(穂状)を作す。其の実は小さく扁平らで、肉が少なく、味は苦い。但核仁は味甘く油多し。果に充てるも可。瘍医油を採って之を用いる」と紹介されています。「アmendou」はポルトガル語の「amendoa」からつけられた名で、ポルトガル船が種子島に漂着(1543)して以降貿易が始まったことから、日本への伝来はその後のことと推測されます。花が華やかで鑑賞に値することから『花壇地錦抄』(1695)の「桃のるい」に「あめんたう 葉ほそく長く、やなぎのごとく。今は中絶してなし」とあり、実際に栽培されましたが気候等が合わず、絶えてしまったことが記されています。『用薬須知』(1726)にも「巴旦杏」として「一名扁桃。和名アmendous。番国より出る木の実の核也。実は食うに堪えず。蠻船載せ来る所の核仁のみを用ゆ」と述べ、輸入した仁を薬用として使っていたようです。(村上守一 記)